

秋のご大祭を晴天の下につとめさせていただきましたことを誠にありがたく、共々にお祝いさせていただき次第でございます。来月も記念祭ありますので、もういいだろうと思ったんですけども、大祭も来てほしいと会長さんが言うので、まあ今日出て参った次第でございます。出て来た以上ちょっとは何か話せんならんということで、暫くお付き合いください。

近年は私も山名の方へはほとんど来ずに、もっぱらおちば専門で、日々通らせていただいておりますが、おちばの御用もほとんどなくて、自分の御用は朝づとめと夕づとめを欠かすことなく出させていただいております。そんな中に、自分の朝夕のおつとめでつとめるお役は、一番多いのは数取、その次が拍子木、その次がちゃんぽんの3つに限られております。朝づとめの拍子木は、だいたい月に3回くらい。夕づとめの拍子木は、10回前後つとめます。今月はもう9回夕づとめはつとめました。そんなことで、おつとめをつとめることは一番大事だと思うんです。おつとめに祈念するわけですが、下手に念を込めると間違ってしまう。特に数を間違えると大変だということでもあります。自分なりに注意をしながらやっておりますが、あしきはらいの祈願のおつとめは21編ありますから、それをつとめながらいろいろと思ってやると数を間違いかねないわけです。自分の場合はもう何年も前から、3編ずつ7編。7編は月様、日様、くにさづち、月よみ、くもよみ、かしこね、たいしょく天。それを3編ずつやる。数取をやる時は、3本ずつ取って、指と指の間に挟んで、1本ずつかえし、3本終わったまた3本、それで三七21編というような仕方をします。拍子木の場合はまず3回胸前でやって、次に3回腹前、次にちょっと上げて3回、更に縦気味に3回、少し下して寝かせて3回、そして下で3回、ぐっと上げて3回。三七21回。ちゃんぽんもだいたい同じような形でやっております。だからあんまりそれに更に加えてどうのこうのとやると、こんがら

かってきますので、一応、おつとめの最中はなるべくそうしております。

ちょとはなしは、一応そのものズバリであります。

今日お話ししようと思ったのは、かんろだい、3, 3, 9編であります。いつごろからか知りませんが、最初の3編は、これはかんろだいで言ったら、基壇の台にあたる。2回目の3回は、2段目の台にあたる。そして、3回目の3編は、最上段の台をいただく。10段積み重ねてあるわけですが、10段の台にあたると思っ
てつとめます。それは、元のちばに伏せこむ、伏せこみの理の姿で基壇の台は
月日親神様の伏せこみから始まっておるわけでありまして、そもそもの宿し込み
から始まって、その理の姿である。下から3段目から上は、立教以来、教祖がお
屋敷にちばに伏せこまれた、その伏せこみの効能、理の姿であり、教祖をいた
だいて通る。最上段は教祖のお徳の理である。最上段のお徳に教祖をいただい
て、道を通らしてもらう道の子の伏せこみの積み重ねの姿が10段の台だと思
うのであります。

最初の3回は、元始まり以来の道筋を3回やる。それを皆さんあんまりそんな
こと知らんと思いますが、最初は、天の神と書いて、天神(てんしん)七だいの道
中。2回目は、地の神様、地神(ちじん)五だいの道中。最後の3回目は、人の神
と書いて、人神(じんしん)六だいの道中。その神様の伏せこみの理に思いを込
めさせていただくということを思っております。説明すると元始まりの話になりま
すが。

次の2回目の1回目は、いわゆる秋の大祭の元である立教。2回目は落ちる
道中、どん底の道中。3回目は谷底せり上げの道中。これは落ちる道中は、18
年かかって落ち切られた。どん底は10年、せり上げが21年。合わせて、合わせ
たら約49年になりますが、実際は天保9年10月26日から、明治20年1月26日
までの間が、いわゆる今日の年の数で言うと48年と68日。足掛け50年という事
になるわけです。その道中をそういう形で思案されるわけです。それを2回目の

おつとめをつとめる。

3回目のかんろだいのおつとめは、積み立てるかんろだいの、今通らして頂いておる道中、道筋。この踏み出しは、初代真柱が真柱とられた、実際にお屋敷の人とられた、明治15年くらいからなってくるわけですけど、その道中。10段の台は、道の子の芯は真柱という事になるので、初代、二代、三代、四代真柱様と、それぞれのその時の道の子の、総和の伏せこみです。その最後に、神様は往還道をつけるとおっしゃっておられる。往還道は、広い道の事を往還道。今で言ったら東名みたいな4車線とか、往還自由という事で、往還道といいます。これは、おさしづでは、そういう意味での往還道とは言ってない。これは世上の往還道で、おふでさきで言われる往還道は、神の往還道。神様は陽気ぐらしの上からお連れ通り下さる中に、皆神の道は心の道で、貸主は神様で、借主は自分の心だと。その中に、陽気の道をつけるためには、心通りの貸し物をおかえしをする。心通りとは、良き事をすれば良きように、悪しきの事はまたかえしする。神様は悪くはなさんけども、かえしする。善悪皆返す。それでこそ心通りです。心通りだから結構やと。だけど、現実には心通りでやられたらたまらんという人いっぱいおるわけです。心の道を陽気に通らすことができんから、親神様は、絶対の御守護を下さるわけやけども、自由じゃない。なぜ自由じゃないか。それは人には心というものがあるから。だから、受け取るのもすぐに受け取り、かえすのもすぐにかえす。だから神の往還道というのは、すぐ受け取り、すぐかえすということ。「このさきハをふくはんみちがみへてある もふあこにあるこゝいきたなり」(おふ四号2)というお歌がありますが、「このみちハいつの事やとをもっている はやくてゝみよもふいまの事」(おふ四号71)と、おふでさきでは言っておられますが、なかなかそうはいかんのですが、いずれその日が来る。本来お道でお聞かせ下さる往還の道というのは、そういう道であります。その時が来ると世界中どんなものでも皆すみわたる。裏をかえせば、神様のお働きなかったら、一れつ澄ますということは成就しない。神の働きの道が、だんだんと伏せ込ませていただ

くその中に、そういう時が到来するということをおっしゃるので、それが先ず積み上げるかんろだいのその先に、それはもうすぐ今のことだと、おふでさきでは当時から言ってもらえますけれども、何年先かわからんけれども、そういう時がくる。それにはまず、日本の者から、更に広く世界に、世界一列にというように、往還道の到来、かんろだいの世界の実現ということになっていく。一れつすましての3回目は、チャンポンでも拍子木でも、やる時間は3分か4分ですけれども、いつもそれに思いを致して、通らしてもらっているという次第であります。

もうちょっとそれを広げて申しますと、まず天神七だい。天神というのは、くにとこたち、をもたり、くにさづち、月よみ、くもよみ、かしこね、たいしょく天。これで天神七だい。それは元始まりの時、虫鳥畜類など八千八度の生まれ変わりを経て、またもや皆出直し、そこが天神七だいの、七だい目の時。かんろだいの7段で言いますと、まず1段目が、月様。いわゆる最初の初段。2段目が道具の模様建てが日様にあたり、宿し込み。3段目が産みおろし、いわゆる75日かかって、順々に産みおろされたらと、産みおろしになると、お産の関係でくにさづちのみことさん。それで五分から生まれ出て、99年経って、3寸にまでで皆出直した。これは月よみのみこと。またもや五分五分と出て、五段目が三寸五分までで、くもよみ。またもや生まれ変わって、四寸にまでなると、これはかしこねのみこと。その後、虫鳥畜類などと八千八度生まれ変わって、皆出直した。これがたいしょく天、これで7段。これが天神七だいに相当すると思います。

次は地神五だい。これはいわゆる人間の創造から、その次のだい、いわゆる世界の生成と人間の成長で、教典の元始まりの話が、ちょっとパラレルになっところがあります、あれは、理路整然としている理の話だと思うんです。

先ず、猿一匹残った。その腹に男5人女5人の10人の人間が宿って、五分から生まれて段々として、四寸の倍である八寸まで成長した。これは、くにさづちのみことさんの、地神の第1だいです。

八寸になった時、人間自身が子を産むようになり始めた。その子を産むのも男5人女5人の10人ずつで、八寸になった時に泥海の中に高低が出来かけた。高低が出来かけるというのはいわゆる、高くなるところは月よみのみことさんですね。一つの御守護の理の姿であります。

子は親となって、親が子を産むという姿になり、人間の成長の中に高低が出来始めたという事だと思っております。それで一尺八寸になった時、今度、元の人数(にんかず)産みそろえ、九億九万九千九百九十九人の元の人数が10人ずつ10人ずつ、子が親となって元の人数産みそろえ、泥海中の水と土とが分かかれかけ、高低だけじゃなくて、水と土が分かかれかけた。そして元の人数が産みそろえて、一腹に男一人女一人の2人ずつ生まれるようになった。だから、一尺八寸から、水は男の理、土は女の理ということになるんだと思う。水と土とが分かれて、2人ずつ生まれるようになった。それで三尺になった時、天地海山日月分かかれかけ、それより人間は一人ずつ生まれ、ものを言うようになった。

三尺になった時が4だい目。それより後に天地海山世界速やかに分かれた。

それで、五尺になった時に、天地海山世界皆出来て、人間は陸上に上がって、陸上の住まいをするようになった。これが5段目であります。これがくにさづち、月よみ、くもよみ、かしこね、たいしょく天ということで、5だい。さらに付け加えると、奈良長谷七里四方に生まれたものは、今の日本の地に上がり、他の地に生み出されたものは、天竺の地までも一つ分かれて、残っていったということが後につくわけです。それが地神5だいという。

その後人間は陸上の住まいをするようになって、一万年くらい前から陸に上がったという事ですから、六千年前から知恵の仕込みが始まると、これが人神6だい。いわゆる人として神様が人間に知恵をさづけられた。その先ず第一がくにさづちのみこと。知恵をさづけられて、蔦や桂等をもって、先ずは身にまとう布を編む道を教えて、裸の身にまとうものを教え始めた。その挙句に段々今日までも

こういう衣服なってくるわけです。

五千年前には、月よみのみことを使って、木や竹で住まう場所を作る道を教えた。その挙句にもっとでかい物を作るようにもなったのですけど、いわゆる衣食住の住まい屋の方です。

四千年前から、くもよみのみことで飲み食いの道を教えた。いわゆる、文化生活の道を教えた。あわせていわゆる文字を教えた。

それでその次に三千年前、かしこねのみことに言葉の道を、これも諸々の言語あるけど、その言語の道を教えたということになると思うんです。言語が出てきたらいろいろの文芸や思想、いろんなことが起こってくるわけです。

それで二千年前、たいしょく天のみことの、切る方の道、いわゆる工作の道具。二千年前といったら鉄器の始まりで、青銅器じゃなく鉄器の始まりやろと思うんです。あれからもう今日まで、もうそういう道具類の始まりがたいしょく天のみこと。金物でも刃物はたいしょく天のみことさんの理合い。

それで千年前くらいになると思うけれども、最後をふとのべのみことさんを通して、生産の道です。その元は農業がほとんどでしょうけども、その生産にかかわるいろんな知恵をさづけられて、それが爆発的になったのはここ百年か二百年くらい前からということになりますけれども、みんなこの人間が生み出した知恵やというものを、神が、人間である道具使って諸々の知恵を教えて来た道中を、人神。月日親神様の神の働きによって、陸上の住まいになってからのことをいわれた。だから人神6だいという言葉は、文書(もんじょ)には載っとらんけども、僕はそう思うのであります。

だから、知るに知れん、神直々からでないと、教えるに教えられんところの、一点。すなわち、元の親、親自身からでないと教えようがない。けども、元の親である月日には、口はない。けどもそれに入り込んで物言わすというわけに

いかんと、年限の到来もって教祖をやしろにもらい受けて、神の胸の内委細を説き明かされるということになって、以後の道が始まったんだということでありま
す。その始まり出しのところが、天保9年10月26日。その諸々の知恵さづけの、
知恵の教えの、最後の一点がそれなんだと聞かしていただくのであります。それ
が天神7だい、地神5だい、人神6だいということです。

それでいよいよ今度は神様はこの世の表に現れた。それまでは月日がこの
世の表に現れてたのが今はじめとのことであって、長い歴史の中に一度もない
と、教祖はおっしゃった。仏教の釈迦とか阿弥陀さんとかのように人として現れ
たんじゃないと教祖おっしゃる。人として現れたのは天保九年10月24日の朝
か、そういう事になるんだと思います。そして始まったお道がいわゆる、教祖の
ご道中であるわけで、その最期は、明治20年正月26日、さっきも申しました48
年と68日ということです。そういう道中であります。それがいわゆる、落ちる道
中、どん底の道中、せり上げの道中という事になります。これをかぐらづとめ
では7回やるんです。7編、7編、7編。

このいわゆる教祖の伏せこみのご道中の中で、いわゆる足掛け50年のご道
中の上で申しますと、落ちる道中は、3つに分かれる。先ずは約3年、内倉に籠
られた。ご自分で黒着のお召し物を染めて拵えられて、庭の井戸で染めたと
おっしゃるんですけど、白糸で縁取りした紋を付けられて、十二べんの紋を拵
え、それをお召しになって、それで内倉に籠られた。そこに約3年とどまられた。

そしてやがて表に出られてからは、物があつては邪魔になる、人だすけは出
来んといって、施してしまえと。教祖は日様の御魂であるから、月様が日様に物
があつては邪魔になる、皆施してしまえと。18年のうちの最初の3年ははずし
て、あとは15年くらいでだいたい物がなくなった。その後、教祖51歳の時に、神
様おっしゃるのに、お針子をとれと、神様は教祖にお聞かせ下されて裁縫を教え
られる。お針子を取られるようになって、お家の中は安定した状態になったんで

しょうね。教祖に裁縫を習いに来られた娘さん方が、教祖をお慕いして、はじめでお屋敷に集まってこられた。そして教祖が56歳の時、善兵衛様がお亡くなりになる、嘉永6年です。でその年に、母屋売り払えとなった。それから2年後、安政2年の年、教祖58歳の年に、3町歩あった田畑、1反分の野菜畑を残して、2町9反を10年の年切で出された。ですからその翌年から収入がなくなったわけです。特にお米とか、綿も沢山作って居られたから綿作とか、これは換金化作物ですけど、まさにどん底に、その日暮らしの状態に入られた。翌年の59歳から10年は、いわゆるその日暮らしというか、どん底生活で、米びつの米がのうても裏側の水は尽きんと、乞食はささんでと言って、教祖があのかんさんにおっしゃったという。

そのどん底の道中の時、お秀(しゅう)さんという、秀司様の娘さん入れて4人で過ごしておられた。4合の米しかなかったので、昼過ぎにお屋敷に来られた方にそれ差し上げて、夕方、どうしようもないわけです。だけど4合全部差し上げられたんちゃうかな、半分くらいあったんちゃうかなあと思うんです。

やがてをびやのおたすけが多かったようですけども、教祖のおたすけにあずかる方がだんだん出てくると、お産だけじゃなくて、産後のもつれって割合たくさんあったようです。山中忠七さんの奥さんの産後のもつれは、お産でいきむと痔になる。痔でどうにもならなくなって、その奥さんの身上のおたすけいただかれて、山中先生ら夫婦で入られた。奥さんの妹さんが上田イソさんで、上田平治という人の奥さん。その方はもう皆、山澤先生の兄弟で、そんな関係で山澤先生も入られて、教祖御隠れの時にも、あの毎日づとめで、たまえさんと、永尾よしえさん以外は、ご婦人さんは上田イソさんで、教祖のおそばでお守り役をされた。

やはり、をびやの御供でというんじゃないで、産後のもつれをたすけていただいたと。本席様の奥様もそうでありましたけれども、そういうような中からついてきて、思惑の大工が来たから普請にかかれと、神様おっしゃるということで、それ

でいわゆる後につとめ場所と言われる建物を建てて、それで翌年慶応元年正月、まだ全部できてなかったところへ教祖お入り頂いて、お正月を迎えていただいたという。障子も4枚入れただけやったという話を聞きます。慶応元年の春になってようやく一応の形が整った。つまり慶応元年まではどん底で、いよいよもうあのつとめ場所出来上がる頃に、材木屋も瓦屋も、支払いが全然出来てない、年も越さなならん、もうどうしていいかわからんという中に、大工を受け持たれた伊蔵様が、秀司様に頼まれたんか知らんけど、お前頼むから断り行ってくれと行って、わかりました行かして貰いますと言ったけども、その阪の大新という材木屋に行き、神さんのことですからと言ってくれた。瓦屋も行ったら同じ返事をしてきて、それで嬉しくなって飛んで帰って教祖に申し上げ、それで更に秀司様こかんさんにその事を申し上げて、その時にこかんさんが、来年になったら質入れの田も帰ってくることやからと。来年と言ったら慶応元年になったら丁度10年たって、3町歩近くの田も帰ってくることやから、帰ってきたら田の1枚か2枚売れば済むことやから、あんたには決して面倒かけんと、心配しなさんなと行って、伊蔵様の後の口述のお話にあるのであります。そこら辺までがずっと、そのいわゆるどん底やったんやろなど。

それから慶応2年から、秋に、多分10月の大祭の前くらいちゃうかなと思いますけども、「あしきはらひたすけたまへ てんりわうのみこと」の、いわゆる祈願のおつとめを教えられた。そこから始まって、年を越して正月から8月までに、一下り目から十二下り目をお付け下された。お付け下さる中から、だんだんとおてふりを教えて下さって、足掛け3年がかりで、おてふりを付けられたということであります。そこらからいわゆるたすけづとめと共に、せり上げの道をお通り下されたのが慶応2年から、21年間、逸話篇に出てくるお話のほとんどは、そのせり上げの道中のいろんな場面のお話だと思わしていただくのであります。

あのかんろだいの積み立てていく方の話は、往還道のことだけにしてやめておきます。で、最後に段々話長くなるんですけども、ちょっとだけ申し上げます。

教祖のひながたを一つ思案さしてもらう時に、僕は教祖のお住まいの場所を思案することが大事だと思います。最初、天保九年10月の、いわゆる寄せ加持の場所は、母屋の、座敷の裏の方の座敷、北側の座敷でなされたという。それは丁度今のかんろだいの座っておる、あのちばの、あそこらへんに教祖はお座りになって、御幣もっておられたんじゃないかなと。それで3日間、問答なさるうちに「差し上げます」ということで、その場所じゃないかなと。

それから、その内倉というのがどこかちょっとわかりません。それであと3年経って、お通り下さった道中は、あの売り払われた昔の母屋が舞台になってる。やがて母屋を売り、一番どん詰まりの北側の隠居所の8畳と6畳、東半分が土間になってるところ、結構大きな建物やったと思うんです。そこへお移りになって、お通りになったということで、それで8畳の間の奥に御幣を作られて祀られてお通りになったようです。伊蔵様入信なされた時、最初のあの御命日というか、月次祭の日に、ご夫婦で参られた時は、もうそれこそとても入りきらないから、外にむしろ敷いて、結構大勢の人が集まったと。だけど本当に、もうみすぼらしてしょうもない家やったという話であります。

そこでずっとお通りになったのであります。それがあの道中でありました。で、いよいよ谷底せり上げのはじめが、つとめ場所の普請があったその翌々年くらいから、つとめ場所の北の上段の間に、約8年か9年お住まいになった。

その頃、黒着をお召しの時は、教祖はいろんなことを他の人と一緒になさってましたが、赤着をお召しになってからは、一切そういうことは神様から止められて、それからちよとして、中南の門屋を建てられ、高い台を据えて、明治16年までお住まいになられた。だから教祖は足がねまる足がねまると言って、もう足がだるくてしょうがないというわけです。朝起きられてから夜遅くまでだろうと思いますけど、座布団にお座りになったままということだから、大変やったやろうなあと思うね。86歳くらいまで。

それですつとめ場所と内倉の間にご休息所という建物をこしらえ、その上段の4畳へお住まいになる。ご休息所にお移りになったのは、明治16年陰暦10月26日の大祭の夜にお移りになったという話ですが、それからほとんどご休息所で寝てられることが多かった。それまではずっと台から下へ降りるなど神様からおっしゃられて、このところより下へ降りるものを何時神がどこへ連れて出るやら知れんてというようなお言葉があつて、警察に引っ張られるようなことになっていく。これは明治14、5年の頃です。人に対する時は北向きですけど、だいたい東を向いてビシッとお座りになっておられた。教祖86歳まで。86歳といつても数えですから、満でいったら84歳か85歳。ご晩年は足がねまる足がねまる言っておられたという話です。

明治16年、86歳の秋から、ほとんど人に会われるとき以外は横になって居られたんじゃないかなということをおもひしてもらいます。それで最後の場所は、北枕の西向きという形です。ずっと最後の3年余りをお通りになったんじゃないかと。

最初はかんろだいのぢばに、それから隠居所の建物は北礼拝場の北側の東の隅、柱が4本立ってる場所にあります。濡れ縁の境目くらいが後ろの裏の道で、その向こうは川が流れてたと。裏川の水は尽きんといつておっしゃった裏川があり、その水で教祖は13歳の年にお屋敷に入られて以来、お隠れになるまで、水は全部その川の水を飲んでおられたという。それが水路の、城山の人らいつも参拝来るあそこの通るとこやな、あのお玄関の前の辺りマンホールがあると思うけど、あそこを流れてどっちからの水か知らんけど、あれがずっと行って、丁度北礼拝場の下ですね、普請の時に埋められてるから、元の地盤はですねもっと低いんです。だから、暗渠になってあそこらへんを通つてると。僕はもうあそこ通ると、ああここ流れとる元の水を、教祖ずっと飲んでほつたんやなど。僕もバイクでいつも行きますけども、あそこから下りて通るときにですね、いろんな時ありますけど、ザーザー雨降つて流れる時もありますけど、そういうことをおもう

してもらいます。

その次があのおつとめ場所の北の上段。北礼拝場の中心からちょっと西寄りの、2畳3畳くらいのところが北の上段です。

そこから、今度は中南の門屋は、丁度南礼拝場の上段上がったところくらいで、芯からちょっと西側に寄ったところ。最後のご休息所の建物が北礼拝場の真ん中近くだろうなと思う。だから参拝さしてもらう時に、教祖の事を思うと、ああここにおられた頃のことやろなとか、そういうことを思って思案すると、いろいろとかなり生々しく受けさせてもらうことが出来ると思います。今日はこの辺にしておきますけども、かんろだいのおつとめから、そういうことを思わしていただきます。お付き合いいただきましてありがとうございました。